プレビュー版

「こんなの下請法違反だろ？」

私は渾身の力を込めて叫びました。社長（父）は、

「もう諦めた・・・」

と投げやりの態度。幹部の誰もが、打ちひしがれているだけで目を合わせようとしません。無駄に流れる重苦しい雰囲気、それは新春早々張り切って生産を開始していた当社を包み込む絶望感以外の何者でもありませんでした。手形決済日は、２月１０日。コニカ㈱との交渉で、支払いサイトを短縮していただいての薄氷の資金繰りでした。しかし、受注が激減した以上、過大な支払い請求はできません。ここ数年間、ピンチになると社長（父）は弱気一辺倒でした。他の幹部にアイディアや対策があろうはずも無く、それはすべて私に委ねられていました。社員をリストラする際の最終面接も、苦情の処理も、おおよそ総ての汚れ仕事は暗黙の了解のうちに専務取締役である私の仕事と決め付けられていました。そしてこんなとき、空元気をだして、絵空事のようなアイディアを搾り出すのも私の役目です。

「資金の不足分は、事情が事情なので親会社に融資を申し込む。そのほかに取引の少なくなったサブ(銀行)に交渉する。メインバンクは社長お願いします。そうすれば何とかなるんじゃない？」と思い切り強がって見せて、その場を収めましたが、このときばかりはもはや何の根拠も自信もありませんでした。そして、その夜、私はＮＳＸのステアリングを握り締め、深夜の高速へ向いました。帰宅せず、あたりを走り回って時間を費やした後、覚悟を決めていました。

「もう、気力が無いし、方法もない。自分が生きていることが価値があるのだとすれば、それは死ぬことが出来るからだろう・・・」

深夜の関越道を新潟に向って走ります。

「踏めるだけのアクセルを踏み、そうして走っていると路面が凍結してきて、そのままスリップするだろう。死ぬ勇気がないなら事故でいい・・・」

もとより涙で総てが霞んでいました。偶然なのか、それとも意識的にそうしたのか、それは今でも思い出すことは出来ません。２百キロ以上の速度で新潟を目指していました。そして急にスッとステアリングが抜けて、車は完全にバランスを失いました。深夜の高速で何度もスピンをして、制御不能な状況。しかし私にとってはその時間がまるでスローモーションのようでした。自

分では助かろうとはしなかったと思います。しかし、気が付くと車は反対向きとなり、側道沿いの退避地点で止まっていました。もう涙が堰を切ったように溢れ出しました。

「死ぬことも出来ないのか！」

何度も叫びました。

それからの2年間は、毎日のように融資の申し込み書類の作成、そして事業計画書の作成をやっていたと思います。受注の大幅な減少局面では、不足資金は並大抵ではありません。1ヶ月、2ヶ月と売上が減少してしまうと、それだけで不足資金は1億円に達してしまいます。1994年、1995年と何をして過ごしたのかさえも記憶に無いくらい、私は生気がなかったと思います。やり繰りをしながら、そして何とか繋ぎながらの2年間は私にとって空白でさえあります。その間、融資を受けた資金は約4億円に達していました。売上高19億円、累積総債務40億円。それが星野金属工業㈱の1996年の姿です。恐らく通常に見積もっても債務超過は25億円以上あったと思います。この頃の私は、いつでも覚悟が出来ていました。そして、もしも倒産の事実が確定すれば、死を選ぶ決意もしていました。

「この規模で倒産と言うことになれば、多くの関係者に計り知れないご迷惑をおかけすることになるだろう・・・」

そのときは死をもって償う以外に方法は思い当たりませんでした。バブル崩壊後、失われた10年と言われましたが、バブルなど私にはまったく無縁の人生でした。それでも、心の整理は付いていたと思います。

「やれる限りやった・・・」

という自己満足だけが、拠り所だったと思います。

私が初めて就職した1983年から1996年までの14年間は、星野金属工業㈱という下請け製造業での年月であり、そのうち約6年間は、本格的に経営者としてほぼ総ての業務を管理運営する責任を負っていたと思います。しかし、それはあくまでも専務取締役としての業務であり、名実ともに経営者を名乗るに値しません。それほどに代表取締役社長という地位は、重要なのだ